
ノア

吟瀬夏樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノア

【Nコード】

N2558A

【作者名】

吟瀬夏樹

【あらすじ】

少年は囚人だった。今まで一度も呼ばれた覚えはないが、名前はノアといった。辺境の街で死を待つ為だけに生かされ、毎日、ただ窓の向こうをぼんやりと見つめる——このまま、僕は消えてしまふのかな？見たことはないけど、きつと『雪』みたいに……。

——何故囚われているのかも知らないまま、彼は静かに目を閉じた。しかし、そこへ彼の守護者が現れて……。

序章 箱庭の罪人

冷たい、綺麗に磨かれただけの床。

繋ぎ目の見当たらない、息苦しさを加速させる無機質な壁。

暗い色の湿ったカーテン。

それに手を伸ばしたとき、ノアはその向こうに窓がないことに気付いた。

2

あると思っていた窓。

それは彼の中にだけ存在した、虚ろな鏡像――この牢獄からの出口。

それは永遠に失われた。

「・・・・・・・・」

ノアは沈黙した。

喉の奥が痛いほど渴いて、叫ぶこともできない。

軽い痛みは、ノアが苦しむのを面白かるように強さを増した。

限界に近付いた器官が、かすれた音を漏らす。

それは死にかけた小鳥の囀りにも似た、耳を塞ぎたくなる雑音。

喉だけではない。

ここ数日、ノアの身体は致命的な不調を訴えていた。

ときおり発作のように襲う苦痛を、彼は何もできずただ耐えた。

「ああ、ああああああっ！」

致命的な痛み。

五感を奪うほどの恐怖。

壁に預けていた身体が滑り落ち、真冬のように冷たい床石が頬を打った。

その衝撃に幼い身体は跳ね、もう一度打ち付けて次は頭部を痛めた。

髪の間から額に赤い筋が伝い、それは幾つにも広がって床に跡をつくった。

横に倒れて息苦しいのに、立ち上がる力も彼には残っていなかった。

窓の外に広がっている世界。

ノアはそれを思った。

混濁した意識の深淵に、僅かに残された記憶を。

今彼がいるのは、大陸の辺境に位置する小さな農村だった。

珍しい泉があり、その周りの森にはたくさんの獣がいた。

毛皮に適した野兎や、流行りの装飾に使われる羽の鳥も泉の周
辺に巣をつくった。

寂れた通りも、それを目当てにやって来た旅人で賑わった時期が
あったらしい。

しかし、それはノアが生まれるずいぶんと前の話だった。

そんな記憶を、彼は持っていなかった。

彼にとってこの街は、永遠に春の来ない牢獄のようなものだった。

窓のない悪趣味な部屋は、何処までも冷たく真っ白で、そして悲し
いくらいに冷たかった。

それはきっと、まだ見たことのない『雪』というものに似ているの
だろう。

そんな事をノアは思った。

幼い頃に読んだ本には、それは冷たく、花びらのように白く美しいとあった。

触れてしまえば熔ける。

消えてなくなる、儚い花。

まるで、自分の命のようだ。

それは春を待たずに逝ってしまう……。

そんな事を思いながら、彼は静かに目を閉じた。

このまま『雪』のように消えてしまうのか、それとも春までこの命を繋げておくことができるのか。

ノアには解らなかったが、そのどちらでもいいと思った。

こんなに苦しい思いをするくらいなら、と彼は何回目かの咳と一緒に

に血を吐いた。

閉じた瞳から流れる雫と混じって、それは怠惰に床へ零れる。

『消えてしまう。』

不意に、声が聞こえた。

幻聴だと思った。

それがあまりに優しかったから。

『何が?』

問うと、声は穏やかに答えた。

『君が………』

会話できるなんて、便利な幻聴だと、彼は思った。

同時に、先程の疑問の答えを知った。

とても、とても静かに。それは夜の海のように、優しく彼に語りかけた。

そう……こんな場所で、自分は果てるのだ。

たったひとりで。

ここで……………。

『君は死ぬべきではない』

『君の……………心は、死んではいけない』

何故かは解らないが、声は必死にそれだけを繰り返した。

死ぬな、と。

何度も繰り返しノアに語り、それ以外は何も言わない。

壊れた器械人形のように、馬鹿々々しいほどそれだけを訴える。

それがあまりに滑稽で、ノアは笑った。

頬を僅かに動かす程度の笑みだったが、彼は苦し紛れに微笑んだ。

『君は、誰・・・・・・・・？』

声は驚いたように息をのみ、戸惑うようにして途切れた。

もう一度繰り返したとき、声はゆっくりと囁いた。
『私は、ジルトラーゼ』

よく解らないが、彼はそのとき幸せだった。

何故だか解らないが、彼は生きたいと願った。

『君の、守護者……』

続いた言葉に、ノアは頷いた。

らなかった。

喉はまだ痛んだが、もう気にな

淡々と告げられた言葉は、どこか懐かしさに似たものを感じさせた。

『ジル……。僕は、ノア』

呟き、横たえた身体を起こして、壁に支えられて座る。

そして彼は、虚空へと手をのばした。

『……。ノ、ア？』

そこに現れた守護者は泣いていた。

表情もなく、ただ涙を流していた。

それはジルトラーゼにとって、二度目の邂逅となった。

第一章 始まりの運河？

きつと、手を伸ばせば届いた。

空は蒼かったが、果てしないようには思えなかった。

人に寿命があり、世界が移ろうように、空にもまた終わりがあるのだろう。

そんな事を思いながら、ノアは見上げていた視線を読み掛けだった本に戻した。

木造の列車は、意外なほどしつかりとした造りで、最初に彼が抱いた不安をすぐに解消してくれた。

車体の揺れも少なく、読書の妨げになるほどのものではない。

終盤に差し掛かった物語りと同様に、そこそこ長かった列車の旅も終わりに近付いている。

座り慣れた椅子の上にある荷物を片手でまとめながら、ノアは上着のポケットにある切符を取り出した。

速度をゆっくりと緩める列車は、小刻みに揺れながら汽笛を鳴らす。

それに驚いて、屋根にとまっていた数羽の鳥が羽ばたいた。

窓から見える景色は穏やかに通り過ぎ、うつすらと夕暮れに染まっている。

彼が目指しているのは、ウェルモリス。

それは始まりの運河。

「切符を見せてもらえますか？」

そう言って顔を覗きこんできた車掌に切符を手渡し、ノアは少ない荷物を鞆に詰めて立ち上がった。

列車を下りると、

先程まで晴れ渡っていた空は暗い雲に覆われていた。

通り過ぎた長い車体と、遠ざかっていく汽笛を見送って、鞆を肩にかけ直す。

細い通路を出ると、違うホームから歩いてきた数人の乗客が、改札口に列んで駅員に切符を渡していた。

料金の高さに文句を言う年配の女を、夫らしい男が諫めている。

足元の猫が困ったように彼らを見上げていた。

ノアはそこを足早に横切ると、暇そうにしていた若い駅員に切符を手渡した。

古びた割には客の多い売店で飲み物を買ひ、駅の外にでると、空は今にも泣きだしそうなほど雲っていた。

傘を買うべきかと迷っていると、小さな古いタイプのバスがやってきた。

後ろに列んでいた婦人が急かすので乗ると、それは先程の文句を言っていた女だった。

「汽車も高いけど、バスはそれより高いわ……」

話し掛けられたのかとも思ったが、単なる一人言らしい。

硝子も何もない窓から顔をだして、雨雲を睨めつけながらぶつぶつと何か言っていた。

後から乗りこんできた、やはり夫らしい男は、こちらに気付くと苦笑して、また妻を諷めた。

何か言おうかとも思ったが、何を言えいいか解らずにノアは黙ってしまった。

男は相変わらず笑いながら、妻の文句が自分へのもに変わったのに気付くと、それを曖昧なものに変えた。

二つ先のバス停で彼らは下りた。

男の方はノアか、あるいは他の乗客に会釈していた。

目的地は教会だった。

丘の下にあるバス停は終点よりふたつ前だったが、彼以外に客の姿

はなかった。

運転手はノアの顔を見ようとしなかった。

駅からの料金を尋ねると、事務的な声で通常より高い金額を告げてきた。

言われた額の硬貨を料金箱に投げ入る。

階段を飛び越えて下りると、水溜まりの水がはねて薄いコートに染みができた。

雨はいつの間にか降り出し、そしていつの間にか止んでいた。

隙間から覗く太陽が、暗い雲をきらきらと輝かせている。

それは虹が空に染み込んだようにも見えた。

「貴方が、新しい神官様あ？」

声に振り向くと、すこし離れた場所にひとりの少女がいた。

丘の上につづく坂の途中で、少女はノアに呼び掛けながら手を振る。

「はじめまして」

言いながら坂を駆け降りてきて、剥き出しになった大きな石に躓いた。

そのまま崩れかかる、少女の華奢な肩を受け止めてやりながら、ノ

アは嘆息した。

「はじめまして、シスター………?」

「エリック………。エリック・アストラ」

少女……エリックは、すこしだけ恥ずかしそうに笑った。

「エリック?」

怪訝に思い聞き返すと、エリックは言い慣れたような様子でつづけた。

そして頷く。

「はい!……でも、シスターエリックはやめてね」

近付き過ぎた互いの身体に気付くと、エリックは慌てて自身を引き離れた。

「ありがとう、神官様」

頬を染めながら俯く姿には、少女らしい愛らしさに満ちていた。

「いいえ……」

その少女を見つめながら、ノアも弱く微笑んだ。

蠟人形のような白い肌を、温い風が凪いでいく。

頬に散らばる真っ直ぐな黒髪が、淡く、陽に透けて光っていた。

「僕は、神官じゃありません」

そして思い出したように上着から眼鏡を取り出し、鞆からはみ出している紙切れを覗き込んだ。

「大教会から来ました。神官代理、ノア・ウルイ・アルフォードです」

書面を目で追いながら言うノアを、エリックは不思議そうに見つめ、首を傾げた。

（自分の名前なのに、覚えてないのかな………？）

その視線に気付かずに、ノアは顔を上げて歩きだした。

大切にしているそぶりはないが、恐らくは重要と思われる書類。

それに重ねた地図を片手に、ひとりで先へ行ってしまうノアを追いつけて、彼女は急な坂を駆け上がった。

マイペースな神官代理は、他人に合わせるということを知らないらしい。

歩調を緩めることはせずに、ノアはすたすたと半分ほど坂を登ってしまっていた。

「神官様……」

慌ただしく走り、追い付いて隣を歩くエリックを一瞥して、ノアは意味もなく嘆息した。「神官、代理です……」

訂正しながらも、この少女には無意味なのだろうとノアは思った。

根拠はないが、何となくそんな気がした。

第一章 始まりの運河？

必要なかったのに……………。

理由なんて、

その真新しい部屋には、窓がなかった。

「綺麗な部屋でしょう？」

ノアを中へ招きいれながら、少女はすこし得意げに言う。

均整のとれた割と広い、冷たい部屋。

「前の神官様が亡くなったとき、王様が新しくしてくれたのよ！」

言いながら、エリックは部屋の奥に入っていく。

簡易寝台に持ってきたシーツを取り付けて、にっこりと微笑んだ。

「そう、ですね……………」

足を踏み入れた瞬間、奇妙な違和感を覚える。

そして、それはすぐに後悔へと変わった。

苦いものが胸に広がってゆくを感じながら、ノアは大きく息を吐いた。

それは致命的な痛みにはならなかったが、それでも彼の心に暗い影を落とした。

その『窓のない』部屋に入ることとはとてもためらわれたが、だからと言って何時までも入口に立ったままでもいることもできない。

彼は仕方なく部屋の奥に進み、簡易寝台の隣に荷物の入った鞆を下ろした。

部屋には寝台と、小さな机。そして右側に目立たないクローゼットがあった。

装飾もなにもなく、一度も模様替えをしないでないことが伺える白い壁。

高い天井。

「あのう……………」

室内を見渡していると、少女の遠慮がちな声がした。

「なんですか？」

振り返りながら、ノアが聞き返す。

少女は何か言いかけて口を開き、そして躊躇うように閉じた。

数瞬後、エリックは心配げな様子できいてきた。

不安と不信の混ざりあったものを瞳に浮かべ、複雑な表情で彼を見つめてくる。

「……………気に入りませんか？」

「？」

「あんまり、嬉しくないみたいだから……………」

エリックは何となくばつの悪そうに、ノアの瞳も見ずに言ってきた。

「いえ、素晴らしい部屋です。僕にな勿体ないくらいだ……………」

無理におどけて大袈裟に言うと、少女は眉をひそめたままぎこちなく笑った。

「欲しいものがあつたら言ってください」

そう言つて、エリックは部屋を出ていった。

少ない荷物を片付けながら、ノアは窓のない壁を見つめる。

この街での生活を思い、彼は溜息にも似た息を吐いた。

どうせ、此処にも長くはいられないだろう。

神官だなんて、やっぱり自分には不向きで。

何より、自分は罪人なのだから………

ぼんやりと、あの『窓のない』牢獄を思い出しながら、ノアは深く沈みこんだ意識を無理矢理に引き起こした。

その運河の街の教会には、一本の大きな木が生えていた。

教会には、エリックの他に二人の子供がいた。

子供と言ってもそれほど幼くはなく、ノアともたいして変わらない。

皆、十代の半ばを過ぎ、

ある程度の知識と教養もある模範的な神学生だった。

ノアよりも一つ年上の少年と、背の高い病弱な少女。

セイルとシルビア。

それにエリック。

その三人が、教会に住んでいた。

三人の仲は良かったが、馴れ合うことを拒むように、頑なに孤独を好んだ。

特にシルビアは、教会の中だけでなく外でも同じようにいつもひとりだった。

それとは対称にエリックとセイルは、同世代の友人をたくさん持っているようだった。

教会の庭にある大きな木のしたで、シルビアはよく本を読んでいた。エリックが時折り、彼女の身体を氣遣って声をかけていたが、決してその隣に腰掛けたりはしない。

お互いに、それでうまくやっているようだった。

三人はその距離感をとても大事にしていた。

ノアの仕事は、教会の管理と、子供たちに勉強を教えることだった。

稀にやってくる街人の懺悔を聞くこともした。

日曜日には庭の掃除をして、午後には子供たちに聖典を読み聞かせてやるのだった。

「神官様……………」

か細い声が掛けられて、ノアはゆっくりと振り返った。

「神官代理……です」

肩まで伸びた髪が風に揺れて、さらさらと音をたてる。

そのすぐ後ろに少女がいた。

エリックではない。

青白い頬に、翡翠のような瞳――。

シルビアだった。

「そう……代理様」

自分に言い聞かせるように繰替えして、少女は頷いた。

「神官、代理様は……本が好きよね？」

唐突に聞かれて、ノアは沈黙した。

「嫌い……？」

抑揚のない声で、シルビアは淡々と呟く。

表情も変化しなかったが、シルビアは僅かに眉をひそめた。

ノアが気付かないほど僅かに。

「好きですよ」

一拍遅れて答える。

そのまま、シルビアは何か考える仕草をして、無言で何処かに行ってしまった。

「何を話してたんです？」

シルビアとすれ違うようにしてやってきたエリックが、不思議そうに聞いた。

何か意図があるふうではない。

純粋な疑問だった。

「本……」

思い出しながら、ノアは呟いた。

「本は好きかと、聞かれました」

「シルビアが、ですか？」

はい、と頷いて、ノアは僅かに首を傾げた。

そんなにおか

しいことなのだろうか。

「シルビアは、あまり人と話したがりません」

エリックはそれだけを、許されない罪を告白するかのようにな、重々しく告げた。

それを口にすること自体を、罪だとも思っているようなそぶりだった。

「いつかは、話さないといけないと思うから……」

そこで、エリックは空を見上げた。

虚ろな瞳に蒼を映して、眩しそくに目を細めた。

「だから今言います」

そこで、ノアはあることに気付いた。

そして、すこしの違和感の正体にも。

いつの間にか、少女はノアに尊敬語を使っていた。

はじめて会った日には、友達に接するような口調だったのに……

・・。

そこまで考えて、それが場違いなことに気付く。

シルビアについて。

目の前の少女は何を語ろうとしているのだろう。

そんなことを思いながら次の言葉を待った。

「シルビアは、後、すこししか生きられません」

しばらくの沈黙の後、エリックは聞き取れないほど小さな声で言った。

「もうすぐ、死んじゃうんです」

風が吹き抜ける。

それに流された大きな雲が、ふたりを包むように影を造った。

そして蒼を隠すように、そのまま空は晴れなかった。

「神様……この本を読み終わるまで、私は生きていられますか？」

少女は、笑った。

とても悲しく。

第一章 始まりの運河？

自由に羽ばたいて、何処へ行きたかったのだろう？

彼女がその教会に来たのは、七年前の寒い雪の日だった。

シルビアが七歳のとき、それまで育ててくれた祖母が死んだ。

祖母知り合いだったその頃の神官が、身寄りのない彼女を引き取った。

それから、また七年。

この教会から出ることもなく、彼女は淡々と生きてきた。

言葉にすればその程度でしかない。

うすつぺらな人生、と彼女は笑った。

祖母は優しい人だった。

最後まで、彼女の命が長くないことを隠し通した。

そのことに、今はすこしだけ感謝している。

死ぬのは怖い。

大好きな本が読めなくなる。

まだまだ読みたい本がたくさんある。

自分をもうすぐ死んでしまうのだと知ったとき、シルビアは思っていた以上に絶望した。

死ぬと言ふことの意味を考えるようになって、彼女はこれまでより更にたくさんの本を読むようになった。

何の為に、自分は生まれてきたのだろう。

何をするために生まれ、死んで逝くのだろう。

答えは出なかった。

だから本を読んだ。

こんなにも小さな自分に、出来ることを知りたかった。

問いの答えだけを捜し続けて、本を読み続けた。

- - 何の為に？

ノアが顔を洗いにいくと、洗面所にはエリックとシルビアがいた。
無言で歯を磨くエリックと、ただ鏡の向こうを見つめているシルビア。
ア。

「シルビア」

呟いたのはエリックだった。

「何？」

振り向いたシルビアに弱く微笑みかけて、エリックは続けた。

「身体、大丈夫？」

「・・・・・・・・」

「無理は、しないでね」

それだけ言って、エリックは何処かへ行ってしまった。

ノアの姿には気付いたようだったが、何も言わなかった。

閉め忘れた蛇口から、冷たい水が勢いよく流れる。

それを止めながら、シルビアはゆっくりと振り向いた。

「私、もうすぐ死ぬの」

「・・・・・・・・はい」

「死にたく、ない・・・・・・・・」

泣くこともせずに、彼女は淡々と言った。

感情のない無機質な瞳が、ノアの暗い瞳と重なる。

「でも、死んでしまうわ」

交差する瞳の色は、ふたりともよく似ていた。

何か言おうとノアが口を開いたとき、彼女は俯いていた。

長い前髪の奥の瞳が、穏やかに細められる。

「私が消えてしまふのが怖い。死ぬのより、ずっと

「・・・・・・・・・・？」

「私はどうしたら・・・・・・・・・・」

声には、やはり感情はなかった。

どこまでも穏やかな、抑揚のない声。

それが告げる。

「どうすれば、消えないでいられるかしら？」

歌を歌うのが好き・・・。

踊るのも、走るのも。

鳥も蝶も花も。

空も。

海も。

太陽と月と星。

空に輝くすべてが好き。

その何よりも本が好き。

貴方が愛しい。

「消えるまえに、貴方と会えて良かった……」

少女は唐突に言った。

「貴方は、私と同じ存在」

貴方を好きなのに、憎らしくてたまらない。

その存在が許せない。

「私たちは、同族なのね」

少女の細い指が、ノアの頬に触れた。

「僕に触るな」

ノアの声を見捨て、指は顎を撫ぜ首すじに絡む。

「僕は死にませんよ。きっと、貴方は死ぬけど………」

彼の言葉に、

シルビアは溜め息を漏らした。

「貴方、意外に冷たいわ。だからとてもつまらない」

少女は、驚いたように目を見開いた。

笑ってしまうほどわざとらしい仕草で。

「私も、まだ死なない」

「・・・・・・・・」

「本は好きよ、ね？」

ノアは答えなかった。

答える必要もなかった。

同族だから。

同じ存在だから。

「貴方のこと、好きよ」

最後にそれだけ言って、シルビアは静かに去っていった。

足音もないのに、長いスカートが床にすれる音だけは聞こえた。

嘆息して、ノアは顔を洗う為に水を出した。

窓から見える太陽は、いつの間にか高い位置で彼を見下げていた。

第一章 始まりの運河？

言葉は、伝える為にあるはずなのに……。

その日の朝食は林檎だった。

皮も剥かれていない真っ赤な林檎が三つ、皿の上ににのせられている。

他の三人の前にも同じように林檎の皿があった。

シルビアの林檎は、スープとも言えるくらいにすられて液状になっていたが、量的には同じだった。

無言でスプーンを口に運びながら、シルビアは食堂の大きな時計を見つめている。

エリックは複雑な表情で、シルビアとノアを見比べ、何時もと変わらない様子で食事する二人に溜息をついて林檎をたべはじめた。

その日の食事当番だったセイルだけが、楽しそうに林檎を頬張っている。

「セイル……………」

シルビアが呟き、斜めに座っていたセイルが振り向く。

「皮まですらないで」

薄い皿の上で、赤い部分を分けて寄せながらシルビア。

「皮にも栄養はたくさんあるんだよ？」

「嘘でしょ？」

「……………うん。でも、適当に言ってるだけだから本当かもしれないよ」

真面目な顔でセイルが言うが、シルビアは無視した。

空の皿を彼の前に押して、無表情に見つめる。

「もう要らない」

そう呟き、シルビアは自室へと戻っていった。

セイルだけは楽しそうに、エリックは苦々しい思いで残りの林檎を口の中へほうり込んだ。

その様子を気にも留めていないノアは、無言でみずみずしい果肉を咀嚼していた。

味はほとんどしなかったが、とびきり美味くもまずくもなかった。

シルビアの身体は、目に見えて病んでいった。

弱音を吐くこともせずに、彼女は強く病と戦っていた。

彼女は強かった。

それでも、視力が衰えだしたのと同時に、彼女は心を病んでいった。

「私……の、目」

彼女が泣いたのは、後にも先にもそのときだけだった。

あの無表情なシルビアが、嗚咽も堪えずに何時までも泣いた。

「見えない……見えない！」

悲しくて泣いたのではない。

苦しくて泣いたのでもない。

ただ、今は泣くこと以外何もできそうにないから。

きつと一生分の涙だった。

彼女の持っているなかでもっとも古い本。

タイトルがわからないほど傷んで色褪せた本。

「大丈夫！」

狂ったように笑いながら、それでも泣いて。

読めないはずの文字を必死で思い出して。

「読めるわ。私はまだ読める！」

身体に障るからとエリックが止めても、起き上がって、何時もの木の下で。

何時もの無表情で。

真っ白なドレスが血に染まっても、彼女は。

「私は、本を読める」

そう言ってきたなかった。

視界が完全に閉ざされると、シルビアは、また冷静さとすこしの笑顔を取り戻した。

前よりもさらにほっそりとして、骨と皮膚だけになった手足が痛々しく。

感情のない厭味や皮肉が、何処までも遠くて。

エリックは笑わなくなった。

セイルは、サボらずに料理を作るようになった。

彼女を取り巻く人々も、すこしずつ変わっていった。

その中でノアだけが、マイペースに淡々と自分の仕事だけをこなしていた。

彼女は、それに救われていたのかもしれない。

自分の同類が不変でいる限り、自分も変わらずにいられると。

「神官様――」

「神官代理です」

うんざりしながら、ノアが訂正する。

「私が死んだら」

シルビアは、相変わらずノアの話聞きかたかった。

そんなことを言えるほど一緒だった訳ではないけど。

相変わらずだな、とノアは思った。

「死んだら、骨を」

「骨？」

繰り返すと、彼女は弱く微笑んだ。

「……やっぱりいいわ。今更、どうしようもないもの」

何もかも、無くなってしまえばいいのに。

骨すらも。

シルビアは、そんなことを考えていた。

「だって、私には・・・もう見えないもの」

声は小さくなって、やがて途切れた。

ノアは最後まで聞き取ることが出来なかった。

「シルビア・・・・・・・・」

意味もなく、名を呼んでいた。

「死ぬのは、嫌よ」

こちらを見もせず、彼女は言う。

「死にたくない。．．．大切なモノは、本だけじゃなかった」

長い髪を風が揺らした。

丘の上からは、街の様子がよく見えた。

美しい運河。

古風な、小さな橋。

坂の下で遊ぶ子供や、その様子を見守る母の姿。

そんなものを眺めて、シルビアは大きく息を吸い込んだ。

溜め息にならないよう、注意して吐き出しながら。

太陽の光りに、輝いた水面に視線を映す。

「丘の下には、小さなパン屋さんがあるの」

そう言って、指先で示しながら。

「その前の道路を進むと、十字路があつて。ずっと進んでいくと、大通りが出るの」

彼女の示す場所は、話とすこしだけずれている。

彼女の指のすこし斜め上。

それが本当の街の様子。

薄っぺらい真実のセカイ。

「この街の人は私に優しくかった。馬鹿みたいに優しくかった」

伸ばしていた指先を戻す。

力の抜けた腕が、だらんと脇に垂れ下がる。

「その理由がわからなかった。エリックは、それが当たり前だって答えた」

街の喧騒が、一瞬だけ聞こえた――。

耳障りと言っには、あまりに優しい雑音。

目を閉じて、二人はそれを感じた。

シルビアは、目を閉じる必要もなかったけれど。

もう、二度と見えないモノなのだろうけど。

「貴方より、私はこの街に詳しいんでしょうね。こんなでも、ずいぶん長く住んでいるから……」

「当たり前じゃないですか……貴女の街なんだから」

「……そうかしら？」

「そうですよ」

慰めるように弦きながらも、ノアの声に抑揚はなかった。

（自分の感情が動かない）

まるで、壊れた時計みたいに。

何も思えない。

「……神官様の心がそんななのは、きっと生きている証なんでしょうね」

そんなノアを見つめ、彼女は伏せていた目を開いた。

重い瞼を押し上げてみても、映るものは何もなかった。

「心残りが、またひとつ増えた」

シルビアは瞬いて、空を見上げた。

微かな光りなら、まだ感じるができる。

「貴方は何を思い、何に殺されるのかしら？」

光りは痛いほど強く、シルビアは目を細めた。

翳した掌で和らげても、圧倒的な光りが指の隙間から射した。

「生きていたら、見られたかもしれないのに。すごく残念……」

「

そこまで言って、堪えきれずに彼女は笑い出した。

「貴方や、エリックとセイル。みんなが私のもとへ来る頃には――」

「・・・・・・・・」

「この街も、私の街じゃなくなっていて」

そこまで言って、彼女は唐突に、大きく目を見開いた。

「――私が死んだら、みんなにありがとうって言うておいて。ね？」

瞳に、暗い影を落とす。

「冗談よ。こんな風なのは、きっと私らしくない・・・おかしい」

「……………でしょうね」

同意するノアに、彼女は憧憬にも似た眼差しを向けた。

彼女が微笑むことはもうなかった。

「本を読みたい」

「まだ足りませんか？」

「全然足りない。もっと読んでおけば良かったって思う……………」

そう言って立ち去ろうとする彼女よりはやく、ノアは教会へと踵を返した。

シルビアは微笑もうとしたが、ノアが振り返ったのでやめた。

何か言いかけた唇が、途方に暮れたように閉じられるのを見て。

何故か、とても穏やかな気持ちになった。

永遠の在りかをしってる。

もうずいぶん、遠くに来てしまったけど・・・

第一章 始まりの運河？

楽園には何があるの？

何もない部屋だった。

部屋の中央に簡易寝台が置かれていたが、シーツも何もなく下の木材が見えていた。

壁はぐるりと本棚に覆われ、どれも寝台から手を伸ばせば届く位置にある。

硬い感触を背中に感じながら、シルビアは膝を抱いて身体を丸めた。

安い金属製の背もたれは氷のように冷たかった。

爪が食い込んで痛いほど、シルビアは自身の肩を抱いた。

ひとりになると襲ってくる恐怖や、悪趣味な夢と絶望。

そのせいで鼓動は高鳴り、嫌な咳をした。

発作だった。

そんな日は、寝台の上で読書をした。

眠れるまで本を読んだ。

けれど、何度見ても本棚は空っぽだった。

まだ読んでいない本も、読み掛けの本も、すべて近くの学校に寄付されてしまった。

最後までエリックは頼んでくれた。

セイルは本をとりにくた業者の背中を蹴ってくれた。

それでも、彼女が一生を賭けて築き上げた本棚は奪われた。

そのまま心まで無くなるのかと思った。

感じたのは絶望ではなく、悲しい落胆だった。

膝に顔を埋めると、涙がゆっくりと頬を伝う。

鍵の壊れた窓から月が見えた。

いびつな満月だった。

月光が彼女を照らして、部屋に長い影を作る。

凍えるほどに孤独だった。

彼女はひとりだった。

他人はシルビアを罵る言葉と、頬を打つ大きな掌しか持たない。

そう思っていた。

彼女の母もそのひとりだった。

始まりの運河。

口の中だけで繰り返すと、曖昧な味が舌をなでた。

何処までも優しく、暖かい不思議な言葉だった。

祖母はこの街を誇りにしていた。

最初は、その優しさに戸惑うばかりだった。

今でも、朝の挨拶すら普通に出来ないけど。

街の人は、そんなシルビアにも優しくかった……だから、どう接すればいいか解らなかった。

それでも、彼女もすこしずつこの街を受け入れていった。

笑いかたを思い出した。

「死にたくない」

いつの間にか口癖になったその言葉を、シルビアは呟いた。

雨は好きだった。

まるで涙するように静かに、頭上に響く雨の音。

あの真っ白なだけの部屋で、聞こえたのはそれだけ。

気が狂いそうくらい真っ白なあの場所で、ひとり。

雨音だけが聞こえる。

あの時は、こうして外の世界で生きていけるなんて思ってもいなかった。

時間と完全に切り離された場所で、カーテンと壁の向こうを夢見ていた。

それが彼にとっての世界であり、現実だった。

「ノア様」

控えめな声に振り向くと、部屋の入口にエリックが立っていた。

「今、お医者様がお帰りになりました……………」

「そうですか」

「薬も、もう殆ど効いていません。昨日から咳がとまらないんです」

「……………シルビアは、なんと言っているんです?」

ノアが言つと、エリックは何かを堪えるように奥歯を噛み、今にも泣きだしそうに顔を歪めた。

唇が震えている。

「し……………シルビアは、私には何も話してくれません」

言葉の途中で、喉の奥が鳴った。

渴いた器官を出入りする風が、ひゅうひゅうと。

「何も……………ですか?」

無神経だと思いつつ、ノアは聞いた。

彼女は頷き、それっきり顔を上げなかった。

前髪に隠れた瞳から、きらきらと雫が落とされる。

それが涙だと気付くまで、とても長い時間がかかった。

「ノア様………」

いつの間にか握りしめていた拳が、震えていた。

それでも彼女の声は澄んでいた。

「……はい」

「神様は、本当にいますか？」

ノアは答えなかった。

代わりに、何時も小脇に抱えている聖典を壁に向かって投げ付ける。

大きな音がした。

表紙の装飾が弾けとんで、頁がばらばらになった。

天井まで舞い上がった紙が、床に落ちる。

それと同時に、彼は呟いた。

「いませんよ」

「神様？」

シルビアが呼ぶ。

答えはなかった。

第一章 始まりの運河？

汚いものが全部悪いなんて、きつとただのエゴだ。

「ジル」

ノアが呼ぶと、彼の守護者は風の狭間から姿を現した。

「なんだ？」

腕を組み、古風な神依の帯にふれながら、ジルトラーゼは嘆息する。

それを無感動に見つめていたノアは、小さく呟いた。

「彼女を、助けたい」

すると、ジルは虚を突かれたような表情をして、まじまじと彼を見つめた。

「何故？」

呟きには、すこしの期待のようなものが混ざっている。

「彼女を助きたいんだ」

「だから、何故だ？」

穏やかな表情のまま、ノアは無言で首を振った。

「解らない。」

自分でも解らないけど、彼女を助きたいんだ」

「……………」

「…？」

「彼女は、このまま死んでいい人間なんかじゃない……………」

思いのほか強い口調で、ノアは言う。

その意味の解らないジルは、表情のないノアと辺りの風景を見比べ、

また嘆息した。

二人の間に影を作る大きな木の葉が、風に揺れて音をたてる。

自分の主より、その木の方がよほど解りやすいと彼女は思った。

「あの日、私も同じことを思った……」

懐かしむような口調で、ジルは呟いた。

「私も、君に生きてほしいと」

言って、彼を一瞥する。

ノアは目を閉じていた。

夕日が眩しかったせいかもしれない。

「うん。でも、たぶんちょっと違うよ」

「？」

「僕は囚人だからね。基本的に悪者なんだ……」

唇の端をゆがめて、ノアは大袈裟に肩をすくませた。

笑ったようには見えなかったが、笑おうとしたのだらうと彼女は思った。

「僕は、汚い人間だからね」

彼の言葉に、ジルは意外そうに首を傾げた。

「……汚いのは、悪いのか？」

「え？」

「どんな理由であっても、君はあの娘を助けたいと思うんだろ？」

「……」

「理由なんて、別に良いじゃないか。……助きたいんだろ？」

ノアは珍しく驚いた顔でジルを見つめ、それから嬉しそうに微笑んだ。

「うん」

「なら、理由も打算も後でいい」

ジルは不敵に笑ってみせた。

ノアとは対象的に澄んだ色の瞳が、悪戯でも思い付いたように光っていた。

「あの娘を助きたいなら、助けよう」

事もなげに彼女は言う。

その顔をノアは見つめた。

「たとえ気まぐれでも、命を救うなんて、それだけで十分素晴らしいことさ」

長い間、心を陰らせていた何かが、ゆっくりと溶けだすみたいだった。

ジルの声には、優しさも特別な感情もない。

そのことが救いだっただ。

「ありがとう」

ジルトラーゼの能力は、他からの対象への干渉を防ぐことだ。

守護者として最も大切なのはそこであり、その他のに秀でた能力はない。

「私にできることは、シルビアを病の干渉から遠ざけることだけだ」
紅茶のカップを持ち、脚を組みながら、妙に優雅な体制で彼女が言う。

「私の力で治癒させることはできない・・・残念ながらね」

「じゃあ、どうすれば・・・」

悲嘆するノアに向けて、ジルは淡々と言ったのけた。

「イカサマしよう」

「はぁ？」

「ルールなんて、今更守る必要はないさ。君のように、彼女にも守護を与えればいい……」

言つと同時に、カップの中身を喉に流し込む。

白い喉が上下した。

「守護？」

「そう。私の力で、シルビアを一生病の干渉から守るのは難しい」

「ああ。まず無理だね」

同意を求められたようだったので、ノアは軽く肩をすくめた。

「なら、一生彼女だけを守る者がいれば問題はない」

中身の少なくなったカップを目の前に掲げながら、ジルが言う。

「それには必要だろ？」

「シルビアだけの、守護者？」

「そう……」

ジルが頷く。

「でも、それは……」

「君が決めるといい」

やはり淡々と、彼女は言った。

「私には、命より尊いモノも比べられるモノもあるとは思えないが・
……」

「……」

「君たちにはあるんだろう？」

「……僕には解らない」

守護を与えろと言ったこと。

平等なる神を裏切り、守護を受けると言ったこと。

「彼女も、罪人に落とされるのかな？」

自分のように……。

「その可能性は高い」

「それでも、彼女は生きたいと願うんだろうね……」

部屋に窓はないが、密談するには都合がいい。

どんな冒涇の声も、空には届かない。

「君が決めることだ」

ジルは繰り返す。

「君にしかできないことだからだ。今は彼女にも、選ぶ権利なんてない……」

囁くように、彼女は続ける。

「シルビアは、僕を恨むだろうか」

その声が、まるで神に救いを求める子供のように。

無性に笑えた。

「恨まれても、仕方がないだろ？」

呆れたようなジルの言葉に、ノアはまた肩をすくめる。

「僕は恨まれてばかりだな」

生まれてきたのを後悔する鳥などいない。

第一章 始まりの運河？

明日が来る。

それがどれだけ素晴らしいことか解りますか？

少年が少女に出会ったのは、七年前の大掃除の日だった。

長身のすらりとした体躯に、腰まである黒髪。

作業衣がまったく似合わない、何処までも遠くを見据える瞳。

『恋』が落ちるものだと知った。

一瞬だった。

それまでの自分が死に絶え、また新しく生まれた。

彼女を好きな自分。

神様に感謝をした。

褒めてやりたいくらいだった。

彼女という人間を生み出してくれたことに。

そして自分という人間に出会わせてくれたことに。

「シルビア」

声をかける。

どうしたの、と振り返る少女。

とても好きだ。

「知ってるかい？街の図書館が新しくなったんだ。」

いいえ。

何時も少年を否定する、その薄い唇が好きだった。

「街の図書館には、もうずっと行っていないわ」

「じゃあ、今から僕といかないか？」

「珍しいのね、セイル。本は嫌いなんじゃなかったの？」

「でも図書館は好きさ。あれは静かでいいね……」

話の最中に漏れる、彼女の控え目な笑い声。

俯くと、頬にさらさらと流れる髪。

「セイルは、図書館に何をしにいくの？」

「最近、寝不足で困ってるんだ……」

くすくすと、可笑しそうに目を閉じて笑う。

少女が笑ってくれるなら、少年はなんにでもなれる気がした。

「じゃあ、セイル。連れて行って」

連れていきたい――。

誰の手も届かない場所へ。

誰にも邪魔されない、奪われない場所へ。

そんなものは何処にもないのに。

「連れて行って」

「一緒にいこう」

「きつとよ」

「勿論」

「ありがとう」

『僕』には何もできないけど。

『君』は笑った。

医者には安静にしているとされていたが、シルビアはすこしはしゃいだ。

人込みを避けて水際を歩いて、久しぶりに魚や水花を眺めたりした。街はやはりすこり変わっていた。

これからもつと変わって、知らない街になるのかと思うと、悲しかった。

セイルは、そんなシルビアを笑顔にするためなら何でもした。

祭の時にしか売られない氷菓子を、どこから買ってきて彼女を喜ばせた。

買い物にも行った。

お互いあまり得意ではなく、欲しいものもあまりなかったけど。

何故だかとても楽しかった。

図書館までにあるすべての店にいった。

着いたのは昼過ぎだった。

「本棚がいっぱい」

彼女はそう言って、入口に一番近い本棚に駆け寄った。

古い背表紙に指をかけ、半分ほど抜いて微笑む。

セイルはさして興味もなかったが、シルビアが嬉しそうなのでつられて笑った。

三階まである城みたいな建物の中に、一生を費やしても読破できないほどの本が詰まっている。

「何から読めばいいかしら？」

「好きなのを読めばいいさ」

「どうしようセイル。決められない」

そう言って、シルビアは一日中広い図書館を歩き回った。

読みたい本ばかりで決められないと、古い絵本を抱きしめながら言った。

「本は逃げないよ。好きなことから順番にどうぞ」

「でも、これを読んでいるあいだに、誰かに借りられてしまつかも」
本は何時までも決まらなかった。

閉館になっても、シルビアは嬉しそうに悩んでいた。

図書館を出ると、既に辺りは薄暗かった。

冷たい風がほてった頬を撫でつけ、何処かへと吹いた。

黄昏れの空を雲が流れ、うつすらと星も見えた。

「楽しかった」

シルビアが言う。

「一冊も読んでないじゃないか？」

「でも、楽しかったわ。すごく……」

何も借りられなかったが、シルビアは満足したようだった。

「それは良かった」

セイルが肩をすくめる。

シルビアが笑った。

「ありがとう」

強い風が、彼女の長い髪を舞い上がらせた。

「今まで、ありがとう」

「シルビア？」

セイルが眉をひそめた。

複雑な感情で見開かれる瞳に、大きく彼女が映っていた。

「最後に、これだけは自分で言いたかった」

彼女は笑っていた。

今日は笑ってばかりだった。

何時も無駄に無表情なのに、今日だけはずっと笑顔だった。

ああ、そうか、と彼は気付く。

僕が、そう望んだから。

自分が笑顔でいてほしいと願ったから、彼女は笑っていたのだ。

「好きだ」

引き攣った声が出た。

自分らしくない。

余裕のない声だった。

「君が好きだ」

もっと気のきいた台詞を考えていたのに、それ以外の言葉は出てこなかった。

ありがとう。

今日何時目かの言葉を、彼女の唇が紡いだ。

思い出を作リたかった？

.

第一章 始まりの運河？

宝箱の鍵は何処に？

風が長い前髪を揺らし、ノアはそれをうつつとしげにかきあげた。

肌寒い外気と雨が、ゆっくりと彼の体温を奪っていく。

まだ雪の気配は無いが、それでも吐き出す息は白い。

冬が、もうそこまで来ていた。

教会へと続く坂道には、落ち葉の絨毯ができている。

冷えた肩が、薄い神官服の下で震えていた。

それを制するようにつつく抱きながら、ノアは坂を登った。

枯れ葉が靴の底で碎かれ、渴いた音をたてて崩れる。

ノアには何の音なのかも解らない。

「――痛ッ」

寒さのせいかな、歩く度に痛みが膝を刺すようだった。

こんな時――ふと思う。

あの大人びた少女。

弱音の吐き方を知らない、ある意味でとても脆い少女。

彼女の感じている苦痛は、いったいどれほどのものなのかと、問いたくなる。

死を目前にして、シルビアは何を思うのか。

ノアには解らなかった。

そんな事を考えているうちに、教会へ着いた。

重々しそうな割に軽い扉が、軋むような音で開いた。

窓のひび割れを隠している板が、風で揺れている。

カタカタと、耳障りな音が聞こえた。

足音もなく静かに、ノアは長い通路を進んだ。

両脇には、教会用に白く塗られた椅子が列んでいる。

しん、と天井まで静まりかえった広い空間。

そして、その先。

「・・・・・・・・」

祭壇の前に、シルビアがいた。

喪服のような黒いドレス。

白面を陰らせる、黒のヴェール。

陰気な瞳。

「シルビア」

ノアが呼んだ。

シルビアがゆっくりと振り替える。

ノアは大きく息を吸い込んだ。

そして、早口に言った。

「もし、生きながらえる術があるとしたら、貴女はどうしますか？」

生きたい。

それは全ての生命に通ずる概念。

生きるために生まれ、種を遺して消える。

その繰り返し。

その無限の輪廻の中で、シルビアは思うのだ。

生きたい、と。

心が

身体が

本能が

生きながらえたいと叫ぶのだ。

死にたくないではなかった。

生きたいのだ。

死の対極が生だとしても、その逆はありえない。

死なないだけではダメだ。

生きなくてはならないのだ。

自身の全てを賭して。

「生きたい」

始めから答えは決めていた。

神を裏切るのだと言われても、躊躇わずに『YES』と答えた。

生まれた時から、その人の事は嫌いだった。

頭が悪く、傲慢で。

シルビアに優しくなかったから。

その言葉を口にした事はなかったけど、何時もそう思っていた。

次の誕生日に与えられる筈だった、その人の聖典を燃やした。

神官は言った。

これは罪だと。

それでも良かった。

誰にも頼らずに生きようと決めた、あの雪の日。

眩し過ぎた一筋の『ひかり』。

それを失いたくなかったから。

シルビアは聖典を燃やした。

神を切り捨てた。

腕の中には何も残らなかったが、何故かとても温かった。

凍える心配だけはないと、神官の守護者が笑った。

それを神官が諫めた。

彼が話す『これから』の事について、シルビアは相槌も無く聞いていた。

もうこの教会にはいられないこと。

自身が結んだ『契約』が仮のものであること。

いつか、代償を支払わねばならないこと。

彼の話す言葉は、とても薄っぺらいものに感じられた。

自分と同じモノでできている彼が、『その人』の名前を口にするのが可笑しかった。

「解りました。ありがとう」

それでも、彼に感謝した。

シルビアが教会に戻る事は出来ないが、彼が行動を共にしてくれる訳でもなかった。

罪人同士が側に居る事は、とても危険らしかった。

どうして、とは聞かなかった。

生きていられるだけで、十分だと思った。

ありがとう。

それも、とても薄っぺらい言葉だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2558a/>

ノア

2010年10月10日03時10分発行